梅村載筆＝林羅山
筆のすさび＝菅茶山
羇旅漫録＝滝沢馬琴
仙台間語＝林笠翁

Ⅱ

日本随筆大成

第一期

吉川弘文館

日本随筆大成　第一期　第一巻
昭和二年四月廿八日発行
編纂者　日本随筆大成編輯部
　　代表　早川純三郎
発行者　吉川半七
発行所　日本随筆大成刊行会

日本随筆大成
〈第一期〉1
昭和五十年二月二十八日　印刷
昭和五十年三月　十　日　発行
編　者　日本随筆大成編輯部
発行者　吉川圭三
発行所　株式会社　吉川弘文館
〒113　東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話東京八一三―九一五一〈代表〉
振替口座東京二四四番
製　作　株式会社　たんちょう社

解　題

本集には、梅村載筆、筆のすさび、羇旅漫録、仙台問語の四種を収める。

梅村載筆　三巻

藤原惺窩　口語
林羅山　〈割〉劄記

梅村載筆は写本として流布の多い本で、一冊本と三冊本とがある。

佐村八郎著『国書解題』には著者を林春信としている事から、著者に就いての問題が起って来る。此れに就いて先ず内閣文庫蔵の写本の識語を左に掲げる。

右一冊林春信（春斎長子四十二歳病死）雅君記云云

長橋云、此書世ニ道春ノ選ト称シテ、文類政事ナドニモ、羅山ノ作トテ視聞ノ所ヲ別ク。尤誤ルナルベシ。書中羅山子語ラレケルハトイヘル語アレバ、道春ナラザルコト明也。

とある。此のような写本が伝播して、種々混乱を生じた事かと思われる。森銑三氏は無窮会蔵の浪華の人杉野恒編稿本『典籍作者便覧』の記事を紹介しておられる。

梅村載筆三、この書惺窩先生の作ともいひ、また先生の作ともす。冊かずも巻附もなく一巻なるもあり。何れ其実否をしらず。

とある。幕末には既に此のような意見も出たのであった。本書の編著者の事は暫らくおき、内閣文庫には今一本古写本があって、此れも注意すべき本と思われる。今一本の識語をも挙げておく。

予雖耻疎筆、蒙再三之責、若強辞則却多罪也。是以妄汚白紙上辺焉、必有落字錯画、後来看吟

之日、請正其失也。

万治己亥歳晩夏　望之日書之者也

芸陽広嶋城　唯素九拝

この両書には「昌平坂学問所」「図書局文庫」の両印がある。この内務省図書局は明治八年九月設置、翌九年四月局に改め、同十八年六月廃止された由の記事が福井保編の内閣文庫蔵書印譜に見えている。

前者は萩原宗固旧蔵本である。筆者は塙保己一の孫源忠韶、萩原宗固は保己一の師である。この本は大変書入割註の多い本で、高田与清はその著『松屋棟梁集』で「三社託宣論」の中に本書を引用している。

さてこのゆゑよしは梅村載筆。〔割註〕正脉六雲峰悦伝云。豈不レ見教中道。寧以ニ熱鉄一纏レ身。不レ受ニ俗心人衣一。寧以ニ洋銅一灌レ口不レ受ニ信心ノ人ノ食一。云々。

このことは本書再刊に当って、栗原野里子氏の調査によって知られた事である。幕末に至るまでに、本書は種々の写本に依って学者を利して来た事が知られる。今再刊に当り、この本及び万治本によって人巻の最後の文章の末の部分な[illegible]

さて「梅村載筆」に就いて、一番新しい解説を附せられたのは、堀勇雄著『林羅山』であろう。堀氏は惺窩と羅山の関係を縷述せられた後に次の如く記して居られる。

「梅村載筆」の著書について佐村八郎の『増補国書解題』は、林春信（羅山の孫で鳳岡の兄）としているが、羅山であることは、(イ)春斎が書いた羅山の編著書目にその書名が掲げられ、(ロ)書中に惺窩（斎）・永雄・長嘯子・閑林などの名が見える点からも立証される。ただ本書に「羅浮子曰」、「羅山子の語に」云々等の語があって、羅山著作説を否定するかの如くであるが、これらの語は本書の

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

天巻・地巻には見えず。人巻のみにあること。また人巻には天巻と同一の文が重複しているものがある点から考えて、人巻には後人の加筆した部分が若干混入している。とすべきであろう。実に明快と云ふべきであろう。

私は静嘉堂文庫にも「梅村載筆」のあった事を思い出し、目録を見たら写本が三部ある。文庫に出かけて一覧すると、何れも人巻のみの本であるが、幕末の国学者日尾荆山の書入本の巻末に、

梅村載筆者惺窩藤先生口語而羅山林先生之所割記也。比者子革借村竹溪蔵本謄写之。余感其嗜学之志助労写末半巻云。

貞享丁卯夏三伏日　　野伝識

とある。この本にイ本との書入があるが此等は皆荆山の筆である。この識語の「惺窩藤先生口語而羅山林先生之所割記也」は、この書著編の事情を細かに云いつくして、すべての誤解を解くに十分である。惺窩子曰があっても、羅山子曰があっても、一向問題をおこす必要はない事である。ただ此の識語を草した野伝と云うは何人であるか、ちょっと手許の人名辞書等は役にたたない。依って森銑三・谷沢尚一両氏の援助を仰いだ処、野伝は小野伝とも書いて内閣文庫に其の編著のある事や、人見卜幽軒の甥で其の養子となった人見懋斎（ボクサイ）である事や、彰考館にある時、義公の命で惺窩文集を編集している事も『耆旧得聞』（小宮山楓軒著）によってわかった。この識語は、先ず信用のおけるものと云うべきであろう。野伝が人見懋斎とわかれば、清水正健著『増補水戸の文籍』や渡俊助編『儒家小誌』にも其の略伝はある。今記事を簡単にするため『儒家小誌』を引用すると、

・人見道毅（伝名 又左衛門）　道毅（字）　懋斎（号）・柔斎　丹波人（生地）　元禄九年（没年）　享年五九　林羅山（師名）　水戸藩儒（備考）　禄三百石、卜幽軒養子

なお、小野を称したのは人見家が小野篁を祖とすると云う事で称したと云う。これは此の外竹敦、井々堂等と称し、内閣文庫には井々堂稿二部が存している。懋斎の前姓は藤田氏である。筆が「梅村載筆」をやゝ離れてしまったが、羅山には羅浮山人の外に、胡蝶洞、梅花村の号があって、何れも羅浮山（広東省増成県にある山で梅の名所）中に在ると云う。本書の題名の拠る所も此れであろう。羅浮山に就いては堀氏の林羅山の号よる所として挙げてある。

本書は天地人の三巻に分れ、天巻は陳眉公云々から初まる短文が多いが、多くは京都関係の記事、宮廷の故実関係の事などが多い。地巻は初に御室への永宣旨から始まるが、この巻はむしろ支那漢籍関係の方が多いようである。人巻は和漢互に相半すると云う内容で、何れも一代の碩学の言説、後人を利するものがある。

林羅山は通称又三郎、名は信勝また忠、剃髪後は道春と改めた。字は子信、号は羅山の外に、胡蝶洞、梅花村、瓢庵其の他多くの号がある。私諡は文敏と云った。其の祖は加賀の人、後紀伊に移り、父信時に及んで平安に住した。天正十一年八月、京洛四条新町（現在京都市中京区新町錦小路上ル百足屋町）に生れた。而して生れて間もなく父信時の兄吉勝の養子となった。『羅山林先生行状』に「先生姓は林氏、実は藤原の末裔にして、其先は加州の豪なり」とあるが、林家が藤原氏を自称していた事と羅山は名門の出身ではないことを知っておけばよいと、『林羅山』の著者堀勇雄氏は云っている。一説に、唐崎彦明の話として、「道春は武家盛衰記に、堺の薬種屋の子としてあるのは間違いじゃ。紺屋の子じゃ。林又三郎といった。建仁寺におられる時、書物を読みふけっては、飯を食いはぐれた事が度々あったそうな。」以上は森銑三著『人物逸話辞典』の記事である。建仁寺のことは、原念斎の『先哲叢談』にも「十四、建仁寺に寓して書を読む。時に宿僧才学ある

者、亦皆屈して字を問ふ」とある。其のため寺僧に僧になる事を勧められたが諾せず。家に帰って寺門に入らなかったという。しかしこの建仁寺に於いて、英甫永雄から荘子や白楽天の講義を聞いた際に、吉田梵舜、松永貞徳などが同席したと云う事であるから、後年の羅山の学者としての生活には大きな影響を与えた事と思われる。而して慶長八年には朱注による論語を公開講義したと云う事があり、清原秀賢からの告訴事件があり、家康の裁定によって羅山の学問の研究と講説の自由が認められたのは、慶長十年頃かと云う。羅山は慶長九年吉田玄之の紹介で、九月九日惺窩を自宅に招き弟信澄と共に惺窩に謁している。惺窩を師としたのは此の頃であろう。家康の知遇を得ては遂に其の学制其の他に参劃し、子孫は徳川家の儒官の職を奉ずるに至ったのであった。惺窩羅山の時代は未だ国学漢学と截然たる区別はなかった。依って羅山には「徒然草野槌」等と云う著もある事である。「梅村載筆」に和漢の事象が入混っているのも最も自然である。羅山は明暦三年正月十七日家綱に供奉し、紅葉山東照宮に参拝し、帰宅気宇常ならずと云う。十九日は明暦の大火である。神田の本宅・銅文庫等が類焼して、上野の別邸に難を避け、同月二十日病臥し、二十三日午後二時歿した。其の火災にあうや其が書の焼失したのを聞いて、「多年の精力が一時に尽く。嗚呼命なりと終夜嘆息し胸塞がり、気鬱して明日遂に歿す」と伝えられている。上野忍岡に儒礼で葬られたが、現在は東京都新宿区市ヶ谷山伏町十六番地林家墓地に葬せられている。「文敏先生羅山林君之墓」と墓碑に刻されている。

林羅山に就いては、『羅山先生文集・詩集』四冊、『寛政重修諸家譜』巻七七、原念斎著『史氏備考』巻一〔静嘉堂蔵写本〕、原念斎著『先哲叢談』巻一、堀勇雄著『林羅山』〔人物叢書118〕には年譜・参考文献など多く挙げてあり、便利である。其の他羅山は大家であるから諸家の研究は多い。

筆のすさび　四巻

菅　茶山　著

本書は、江戸末期の詩壇に、清新な作品として詩名の高い茶山の晩年の随筆である。和文でさらさらと書き流して、少しの飾り気もなく記述されている。四巻の内容は、第一巻の「月蝕」から始まって、第四巻の「夜半の鐘」に至るまで併せて百六十一条に及んでいる。雅談、俗談、奇事、史談、知友より聞いた話など其種類は多く、何れも趣味多き話柄であるのは、著者其の人の人柄の良さを反映している物かと思われる。

私等には、本書によって茶山の友人関係等の親疎の関係等も窺われる事などに、興味深いものを感じる。文政の初め頃に江戸には牽牛花（あさがお）がはやり、幕臣の詩人、岡本花亭が其の記を作って茶山に示したとか、江戸に来た節に、加藤千蔭門下の木村定良を介して、千蔭や村田春海と会っていることなどは、茶山に歌集があると云う事を五弓久文が書いている事と合せ考えて、興味深いものがある。其の他高山彦九郎の伝だとか、友人の佐渡の人中山貞蔵伝なども茶山の周囲の人物として注意してよかろうか。「機巧」として表具師幸吉の事のあるのはよく他書にも引用されているかと思う。とにかく各条を引用していたら限りがないので此のへんで筆を留める。

本書には頼山陽門人の後藤機の序文がある。後藤松陰は文化三年師山陽に伴われて西遊の時に、茶山の家に寓する事三旬許、毎夕翁の飲酒の対手をして異聞奇事及国産の事などを話したと云っている。本書の成った背景には茶山の諸友に就いて此のような事が多かったと思われる。これらが此の豊富な随筆の源泉の一つでもあろうか。松陰の序は安政三年に草されている。なお本書には木邨雅寿の天保七年春の記も松陰の序の次にあって、此れには茶山が雅寿に先ず第一巻の校写を托し、

次いで、病によってあとの三巻はわがなくなりて後如何にもなしてよ、と云われたのを秘蔵していて、書肆の乞うままに与えた由を記している。木邨雅寿は字は万年、俗称長作と云って茶山の甥である。中央区立図書館蔵加賀文庫中に、出版元の書肆の刊行を願い出た時の本、所謂願本が蔵せられていると森銑三氏は『江戸随想集』の解説に陳べて居られる。

菅茶山　名は晉帥、字は礼卿、通称は多仲、茶山と号した。菅は姓の菅波を修したのである。寛延元年備後国神辺の裕福な農家に生れた。家業は農の外に造酒業をも営んでいたと云う。父名は扶好、字は樗平、母は佐藤氏、三男二女を生んだ。茶山は其の長男であった。父は頗る書伝に渉り、母も亦国史を誦して子に訓えたと云うから、家は好学の一家であったろう。茶山は少年の頃他の子供達とともに山林に牛を牧していた。他の子供達が遊びたわむれているなかに、茶山はひとり「唐詩選」を手にして行って、それを声をあげて読んで楽しんでいたと云う。此れは森銑三氏が『人物逸話辞典』に土生玄碩の話として紹介しておられる。弱冠にも及ばずして京都に遊学、那波魯堂（徳島藩儒）の門に学んだ。西依拙斎は同門の誼で、親交があった。又医学を和田東郭に学び、学成って帰郷後医を業とし、傍ら私塾を開いて徒に教えた。此れが廉塾であり、茶山の住居がそれに接していたので対面の山の名をとって黄葉夕陽村舎とも名づけられた。茶山の号は近くの茶臼山に拠ったものである。田能村竹田の『屠赤瑣々録』によれば、明和七年、歳二十三の頃、京都で大雅堂に親しく画を乞うた事や、蕪村にも出会ったが挨拶はしなかったとも云っている。この三巻には茶山翁の京都の話がなお少々出ている。京都では六如上人や大阪の混沌社の人等と親交があった。篠崎嶋、葛子琴、頼春水、中井竹山、日履軒、合麗王などの名をあげ、「生れて諸子時を同じくす。な三んの幸かこれに過ぎん」とも云っている。さて学者としての令名は人々に知られ、藩中にも茶

山を儒臣として推す人もあったようであるが、本人に其の意が無かったので実現するに至らなかった。ところが福山藩主阿部正倫公が、林述斎から菅茶山の優れた詩人である事を聞き知り、茶山を江戸に召して、特別の扶持を出して、諮詢等する事のあったのが、寛政四年茶山四十五歳の時である。而して正式に藩儒となったのは文化元年阿部正精公の時で、此れには近藤重蔵の推奨があったとの事がある。晩年の茶山は、親友頼春水のために、その子山陽を引き取り、父春水に代って、大いに面倒を見た事である。山陽は暫くにして、亦慈父の如き茶山の膝下を離れ去るのであるが、後年の山陽は師父として其の高恩に伏し、『茶山先生行状』を草する事である。中島棕隠は、文政十年四月二十二日に初めて茶山を訪うて、其の後度々其の居を訪れたが、茶山の死を報じて、五月下旬より嗄(むせぶ)症にて病気、追々甚、八十老人じり〳〵へりにて、ついに八月十四日夕方逝去した。十九日帰りがけに会葬と云っている。網谷村に葬られたのであった。茶山は詩名の高きを以て、自ら尊大とはならず、貴賤雅俗とともに皆その歓心を失わず、物に接すること謙和で、その外貌は、朱顔白髪、恂々として田舎翁の如くであったと云う。最後に茶山の歌を『屠赤瑣々録』から引用してこの稿を終りたい。

わが宿のいつもと柳いつかまた君が月見の駒を繋がん

「筆のすさび」三巻、「柳三種ある事」の条に見ゆる柳である。

著す所、『黄葉夕陽村舎詩』三編・凡そ二十三巻、『文稿』四巻、『福山志』三十五巻、『室町志』、『福山志料』、『答問福山風俗記』、『大和行日記』（日本芸林叢書第四）、其の他がありと云う。其の伝記資料としては、『事実文編』巻四八（五弓久文著）、『在津紀事』（頼春水著）、『菅茶山先生』（浜野知三郎著）、『芸備の学者』（和田英松著）、『茶山年譜』（備後郷土史談会編）、『江戸後期の詩人

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbo

達』（富士川英郎著）、『田能村竹田全集』（早川純三郎編）、『森銑三著作集』第九巻、其の他に関係事項がある。

羇旅漫録　三巻

曲亭馬琴著

『近世物之本江戸作者部類』を見ると「享和二二年の冬、羇旅漫録三巻写本を綴る。戯墨の紀行也。明年癸亥蓑笠雨談三巻を編述す。去年遊歴中の随筆也。蔦屋重三郎板也。後に大阪河内屋太助の蔵板となれり。」とある。

馬琴の生活は寛政の末頃には漸く安定し、寛政十二年、妻お百が三女くわを安産すると、かねて計画していた伊豆旅行を決行した。九月十日江戸を出発して、武州金沢、浦賀、下田に出で天城越えをして修善寺に遊び、帰路鎌倉に立寄って、一ヶ月程の旅を終えた。この家庭の俗事から解放された喜びは其の後の創作意欲にも役立った事であろうか。又翌々年の京阪大旅行となった事でもあろう。この紀行に就いては、『馬琴年譜稿』（「ビブリヤ」三七・三八）に左の如くあるのが要を得ている。

五月九日、江戸を発つて京摂に遊歴す。傭僕文助同行、遠三の間、岡崎又吉田に連宿数日、尾張、名古屋に至りても、又友人に留められて数日を経たり。七月に至りて京師に遊ぶ事二十余日、下旬大阪に至る。其節東西大雨洪水にて、進みて西に遊ぶことを得ず。帰路伊勢に参詣し、八月二十四日江戸に帰着。旅行記「羇旅漫録」を著す。馬琴の上京遊歴の時、京伝の書画百枚余を乞い、京伝の書画を弘むという事を狂文に記して上木して、遊歴の諸国へ売り、旅窓の費用にあてたる事あり。其時の狂文梓行のもの、今京山蔵す。（『蛙鳴秘鈔』）

この『蛙鳴秘鈔』の京伝の記事は、本書巻頭「今朝京伝には神奈川にて別る」とあるのと併せ考え

る時、其の親交の事が伺われる。

森銑三氏は、この書の印象を左の如く記して居られる。

享和三年の夏から秋へかけて、上方を歴遊した際の覚書で、純然たる随筆とは称し難いが、しかし紀行というよりも、やはり随筆といふに近い書を成している。この旅行は、馬琴生涯を通じての大旅行だったのではあるし、根が綿密な人だけに、何かと精しく書留めており、他の馬琴の随筆のような学問を衒った点などなくて、それだけ素直に読める。

更に著者自身は崖言に、

遊歴中おのが目に珍らしとおもへるもの悉これをしるす。古人の略伝、墓誌、珍書、風俗の異体、方言、妓院、雑劇、年中行事の異同、名所古迹、古人の墨跡等なり云々。

とあるように作家としての眼で集めた資料は、又それ自身後人の好みにより尊ばれる事になって、好随筆となる事である。この紀行の観点を更に薄めて編まれたものが享和四年刊の「蓑笠雨談」三冊である。本書と併せ見るべきであろう。遊歴中各地の名家との交流等も、馬琴研究の資料を呈するものであろう。

曲亭馬琴の略伝等は第二期第一巻「兎園小説」の条を見られたい。

仙台間語　四巻続三巻

林笠翁著

本書の著者笠翁は、前名を岡村良通と云った。幕臣で小納戸兼書物奉行で、従五位下大炊頭に叙された。元文五年同僚が武士道に反した行のあったのを憤慨して、これを手にかけたので除禄せられ、名を変えて林摩詰と称し仙台に籠居した。本書に「仙台間語」とあるのも此れに拠るものであ

る。著者の学統等其の伝を補する記事は第三巻の末、老後仙台に寓居して病に罹り云々の条にある。この著者は一家の言を持して、当時江戸に根を下し初めた真淵等を評する所など、当時の学界の事情などを考えさせられる点もあって、私共に大いに参考になると思われる。其の伝に、書物奉行とあるは如何であろう。森潤三郎著『紅葉山文庫と御書物奉行』には其の名が見えないようである。しかし「鳴鳳卿云翻旧ノ字珍シ」等云う所を見ると成島錦江とは親しかったのではあるまいか。冷泉家門人磯野丹波守政武著『仰高録』（内閣文庫蔵）を見ると、当時の紅葉山文庫の和書や蘭書等に関する世話など成島錦江が主として、之に当ったと云う事があったかと思う。此の点から見ると笠翁も錦江と共に御文庫に関係があったかもしれぬと考えられるのである。笠翁は「荻生徂徠ノ門人タラントシテ果サズ。春台、南郭先生ニ謁シテ頻ニ学ベドモ、時過ギヌレバ成コトナシ」と自ら云うように、徂徠系の学統を踏むものと云うべきであろう。朝板の所には「京都に岡部衛士と云男アリ」から初って、冠字考に及び、「総ジテ真淵ノ説ハ衆ノ物語ヲ聞集メテ衆議判也」などと評し、「真淵門人伊能青藍、橘千蔭両人ヲ以テ、其コトドモ云ハセタレバ答ヘズ。冠辞考ハ不出来故、板ヲ破ルト云タリ。過ヲ知リタルカ、板モ破ラヌト見エテ、近日京師ヘ遣タレバ、搢紳家ニテ特ニ行ハルト聞ク。京師ノ学モ思ヒヤラレタリ」とも云っている。此れは真淵の条を一例に取ったのであるが、著者の博覧と自信の程全巻に溢れている。注意すべき随筆と見るべきであろう。この三巻の終に「明和元年甲申十二月　猶書マク欲キコトノ有ド、紙ノ不レ足バ筆ヲ措ヌ。此後紙ヲ求得バ、書続ベシト爾云　東都林笠翁志」とあるから或はここまでを正編とすべきかと思われる。本大成本の拠った宮内省書陵部本は、「狂哥堂文庫」「掃葉山房蔵書」の印記があって、北川真顔、東条琴台等の蔵を経て図書寮に収められる事が知られるが、又「明治十八年改」や「図書寮印」の印記もあって図書寮に収め

られた時はほぼ明かである。

本書は旧刊の時も宮内省図書寮尊蔵の写本を無窮会蔵本によって行を遂げたのであったが、再刊に当っても宮内庁書陵部の御厚意によって、主として校合を施すことを得、梓行する事が出来た。巻末に当り再度にわたる同書の使用の認可を賜ったことに感謝の意を示する事である。

笠翁事岡村源五兵衛良通の事は大正の末比、真山青果に『林子平の父』（真山青果随筆選集 第一巻収録）により、初めて世に紹介されたと云う事である。其の後の事であるが、東洋文化百九十一号に「隠士林笠翁」の稿を伊藤武雄氏が寄せておられる。全文を掲げれば一番いいのであるが、今は其の大要を抄出して笠翁の略伝としたい。初めに「仙台間語」の事に触れておられるが此れは省いて、松井真玄（松葉）著『少年読本林子平』を引用しておられる。即ち、

子平が父岡村源五兵衛大炊頭良通に至りて、はじめて幕府に召され、小納戸兼書物奉行として六百二十石の禄を賜はりたり。源五兵衛に賜はりし邸は、四方に門ありて方位に配したりしかば、六代将軍家宣公自ら四門といへる姓を賜はり、従五位の下にさへ叙せられたり。源五兵衛は書物奉行を命せられつる程の人とて、学問を好みて博く古今に渉り、和歌をも能くしたり。最も国朝の典故に通じ、儀式攷十巻を著はし、晩年正統仙台間語の著あり。新井白石とは極めて親しき間柄なりしといへば、其人となり思ひやるべし。（中略）然るに源五兵衛は元文庚申年十二月、同僚何某（大鳥忠太夫）が武士にあるまじき罪過を犯しけるに、其組頭が毫も咎る所あらざりしを憤り、終に何某を手にかけ立退くに至れり。運命は斯くの如くにして寵児に向って背をむけたり。源五兵衛も今は江戸に止るべからず。五人の子と母と妻とを悉く、弟従吾に托して、其身は姓名を林摩詰とあらため、常陸国に流浪したり。時に子平は年甫めて三歳、兄

嘉善わづかに五歳、長姉なよは十二歳にして、仲姉なほは九歳、季妹たちに至りては当歳の嬰児のみ……。叔父従吾は、お清の方（子平の仲姉なほ、仙台侯伊達宗村の側室となる）が静姫君を挙くる前日、三月十四日（宝暦二年）といふに四十六歳を一期として、此世を去りぬ。摩詰は訃報を得て、飛ぶが如く江戸に帰り、帰後摩詰は自ら其名を笠翁と改めぬ。云々。

笠翁は明和四年六月二十一日歿した。享年六十八。この年子平は三十歳であった。笠翁の歿したのは江戸であったか、仙台であったかが不明である。『仙台人名大辞典』によると、仙台北八番丁竜雲院に葬するとある。伊藤武雄氏の調査によると、東京小石川区水道端町（現在文京区小日向一丁目）日輪寺にも笠翁の墓があると云う。小さな石で、

白眉笠翁居士
心了院孝明宝寿大姉
不昧院智岳妙慧大姉

と刻し、右面に、

白　明和四丁亥　六月廿一日
心　宝暦七丁巳夭
不　寛政元己卯九月廿日

左面に、

祠堂附
五月二十八日

と刻する。

心了院は良通の母、渥美氏のこと。寿八十歳。不昧院は笠翁の妻であろう。
叔父従吾の墓もここにあって、

正面、林従吾辟世墓

右面に、宝暦二壬申年

左面に、正月十四日　祠堂附刻

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongboo